

はじめに

戦後東アジア史の新たな視点

中村 元哉

本論文集は、日本と中華圏（大陸中国および中華人民共和国成立以降の香港、マカオ、台湾を示す「兩岸四地」の意味として暫定的に使用する）の人的ないしは文化的交流史を第二次世界大戦を跨いで考察した「東洋文庫ならではの」研究成果であり、「世界最先端」の研究成果でもある。「東洋文庫ならではの」という意味は、この研究成果が東洋文庫所蔵の「明治以降日本人の中国旅行記」（「日本人の中国旅行記」）コレクションをベースとしているからである。このコレクションの全貌は東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（財団法人東洋文庫、1980年）および村田雄二郎・池田尚広・久保茉莉子・関智英・辻直美・中村元哉・山口早苗・吉見崇『明治以降日本人の中国旅行記（解題）増補版』（東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班（国際関係・文化グループ）、2023年、doi: 10.24739/0002000041）によって全世界に向けて無料公開されており⁽¹⁾、本論文集はこのコレクションの特質の一端を明らかにした。また、「世界最先端」という意味は、日中国交正常化までの戦後の日中関係史（1945年から1972年まで）の新たな一面が「日本人の中国旅行記」によって復元されると同時に、その新たな知見を共有した国内外の研究者が戦後の日中関係史をよりマクロな視点から再考するための新たな歴史事実を提供しているからである。

本論文集は、東洋文庫現代中国班「国際関係・文化グループ」の一翼を担う

(1) 「東洋文庫→蔵書・資料検索→学情情報リポジトリ→研究成果→現代中国研究班」とアクセスすれば、誰でも入手できる。

「日本人の中国旅行記」メンバー（村田雄二郎、池田尚広、久保茉莉子、関智英、中村元哉、山口早苗、吉見崇および相原佳之、辻直美）の活動成果である。具体的にいえば、東洋文庫現代中国班が2021年度と2022年度に主催した国際シンポジウム「冷戦下における日本と中華圏の人物交流史（第1回）（第2回）」の研究成果を基盤としている（末尾の参考資料1・2を参照）。

本論文集の学術的意義は、日中国交正常化以前の米ソ冷戦のイデオロギー対立が1940年代後半から1970年代前半にかけて東アジアを覆っていたなかにあっても、戦後の日中間の人的ないしは文化的な交流（体験を含む）が決して途切れていなかったことを実証したことである。むろん、従来の研究も、日中間の民間貿易や民間交流の歴史に注目したり⁽²⁾、日台間の政治外交関係を総括したり⁽³⁾、冷戦下における普通の人びとの心理状態を解明したりしてきた⁽⁴⁾。しかし、これらの研究からは十分には読み取れない新たな視点が本論文集には含まれている。それらは、少なくとも三つある。

一点目は、日中戦争もしくは第二次世界大戦を時間的に跨ぐ、いわば戦前・戦中・戦後の関連性が明るみになったことである。この関連性には、中国国民党（国民党）を中心とする中華民国（民国）期からの繋がりも含まれている。二点目は、中華人民共和国（人民共和国）が日中国交正常化以前に日本人に何をアピールしたかったのかを整理することで、当時の中国共産党（共産党）のプロパガンダ外交（宣伝政策）の一端が逆照射されたことである。三点目は、日本と中華圏の関係性が当時の東アジアを覆っていた「文化冷戦」（国民党や共産党および米国（アメリカ）からすれば「文化統一戦線」）と呼ばれた国際政治のなかで形成されていたとはいえ⁽⁵⁾、それでも戦前・戦中・戦後を貫く東

-
- (2) 概説書も含めると無数にある。さしあたり、実証研究を支える最新の成果の一つである嶋倉民生・井上正也編『愛知大学国際研究所蔵LT・MT貿易関係資料第5巻——日中貿易関係資料』（ゆまに書房、2018年）のみを指摘するにとどめておく。
- (3) 川島真・清水麗・松田康博・楊永明『日台関係史——1945-2020〔増補版〕』（東京大学出版会、2020年）。
- (4) 益田肇『人びとのなかの冷戦世界——想像が現実となるとき』（岩波書店、2021年）。

アジアの歴史性が存在していたことが明らかになったことである。

本論文集の刊行によって、冷戦下の戦後東アジアで展開されていた日本と中華圏の人的ないしは文化的な関係性に対する理解は、今後ますます深まっていくことだろう。このような認識の深まりは、戦後東アジアを冷戦の視点からだけでは語れないこと⁽⁶⁾、つまり、権力の視点か大衆の視点かを問わず、1940年代後半から1990年代前半までの戦後東アジア史をグローバルヒストリーとしての冷戦史として語ることに限界があることを示唆している。

以下では、冷戦期の戦後日中関係史や戦後東アジア関係史をさらに発展させるために、下記の三点が重要であることを指摘しておきたい。

一点目は、「日本人の中国旅行記」を政治家もしくは政治家が関与した各種の団体に注目して整理した場合、自由民主党系（自由党・改進黨なども含む）や日本社会党系（民主社会党・民社党も含む）、あるいは議員連盟や友好団体、さらには地方自治体の訪中記録が比較的に多いことである。すなわち、私たち研究者は、これらの政治色の強い訪中記録から中国側の対日交渉担当者の情報がある程度復元できる、ということである。毛沢東、周恩来、鄧小平、彭真、廖承志、南漢宸、喬冠華、李德全、趙安平、王国権、王曉雲、孫平化、郭沫若……といった共産党の主要人物はもちろんのこと、対日交渉の実務を担っていたと考えられる人物がたびたび登場する。たとえば、楚図南（雲南出身／1926年に中国共産党に入党、中華民国期に中国民主同盟にも参加していた二重党籍者／中国人民対外文化協会会長）、劉希文（遼寧出身／1938年に中国共産党に入党／対外貿易部、中国中日備忘録貿易弁事処代表、日中長期貿易協議委

(5) 潘光哲「『重東亜脈絡下的冷戦』專号導言」（『思与言』第57巻第4期、2019年）、土屋由香・川島真・小林聡明『文化冷戦と知の展開——アメリカの戦略・東アジアの論理』（京都大学学術出版会、2022年）。

(6) 一例として、戦後台湾の自由主義をめぐる諸情勢がある。中村元哉「美蘇冷戦下の港台反共自由主義——解読人権思想的政治背景」（国立政治大学図書館特蔵管理組編輯『未完結的戦争——戦後東亞人権問題』国立政治大学図書館、2019年）を参照のこと。

員会中国側主任)、呉曙東(中国中日備忘録貿易弁事処駐東京連絡処代表〔1964-68年〕、対外貿易部四局副局長)、許宗茂(中国中日備忘録貿易弁事処駐東京連絡処随員〔1964-68年〕)らである。この他にも、楊温玉や勇龍貴など略歴すらわからない人物も登場する。実務担当者が偽名を使っていた可能性も含めて、登場人物をリスト化して精緻に検討していけば、戦後日中関係史の臨場感を再現できるだろう。

二点目は、東洋文庫でコレクションされている「日本人の中国旅行記」や他の研究機関で所蔵されている類書とは別に、当時の日中関係の現場に身を置いていた関係者らが保管してきた史資料が国内各地の学術機関に寄贈(移管)されていることである⁽⁷⁾。たとえば、東洋文庫現代中国班「国際関係・文化グ

周恩来首相との記念写真(1968年1月18日、人民大会堂にて)[提供者:坪井隆治氏]



前列左から:王菡圃、張奚若、枝村要作(衆議院議員)、石野久男(衆議院議員)、周恩来、藤原豊次郎(元衆議院議員)、松本康行、不詳(船橋市議会議員*)
 中列左から:野口幹彦、坪井隆治、平塚重夫、黒田明男、原田隆治、不詳(船橋市議会議員*)
 後列左から:不詳(中国工作員)、不詳(中国工作員)、金蘇城、蕭向前、王曉雲
 *亡命中の郭沫若と親交のあった藤原豊次郎氏に同行していた人物

ループ」には、日本社会党衆議院議員帆足計の公設秘書を務め、1968年初頭にプライベートで訪中した坪井隆治のインタビュー記録（2021年9月1日実施）や同氏が私蔵していた貴重な史資料が保管されている。これらには、周恩来総理と接見した際の記念写真（『人民日報』1968年1月19日4面に掲載された写真）も含まれている。また、このプライベート訪中団の移動日程表にも、訪中団の典型的な移動パターンが刻まれている。

〈移動日程表〔作成者：坪井隆治氏〕〉

1968年1月

- 9日 夕刻 神戸港出港 中国貨物船「療原号」
- 14日 大時化のため山東半島・榮成湾に仮泊
- 16日 正午 天津新港着→北京へ（乗用車）
- 18日 PM2:40-5:00 周恩来総理と会見 人民大会堂
- 21日 北京→上海（空路）
- 28日 上海→南京經由→山東省済南（空路）
- 30日 済南→北京（空路）

2月

- 5日 午後 郭沫若氏の講話を聴く
- 6日 北京→鄭州經由→武漢經由→湖南省長沙（空路）
- 7日 長沙→韶山（毛主席の生地）マイクロバスにて3時間
- 8日 韶山→長沙

(7) たとえば、京都大学人文科学研究所で一時期保管されていた古井喜実文書がある（現在は国会図書館で整理中）。この古井文書を活用した学術成果の一つが鹿雪瑩『古井喜実と中国——日中国交正常化への道』（思文閣出版、2011年）である。ただし、井上正也『日中国交正常化の政治史』（名古屋大学出版会、2010年）、王雪萍編『戦後日中関係と廖承志——中国の知日派（ジャパンハンズ）と対日政策』（慶應義塾大学出版会、2013年）など、日中国交正常化の歴史を検討した学術書は多数ある。それらをバランスよく読み込み、精査する必要がある。

- 9日 長沙→江西省南昌（空路）
- 11日 南昌→吉安（乗用車）
- 12日 吉安→井冈山（革命戦争時の根拠地）マイクロバスにて7時間
- 14日 井冈山→吉安 大雪のためマイクロバスからジープに乗りかえての強行軍
- 15日 吉安→南昌（乗用車）
- 16日 南昌→杭州（空路）
- 17日 杭州→新安江ダム・発電所（乗用車）
- 18日 新安江ダム→杭州（乗用車）
- 22日 杭州→上海（汽車2時間半）
- 24日 正午すぎ 上海・黄浦港出港 中国貨物船「真理号」8,000トン
- 25日 正午すぎ 門司港上陸

三点目は、「国民党+旧満洲国関係者+旧汪精衛政権関係者⇔香港（⇔台湾）⇔日本」と図式化されるような人的な流れが存在していたことである。これまで、国交正常化以前の戦後の日中間に戦前・戦中からの人的な繋がりがあったことは知られていたが⁽⁸⁾、実は、このような香港を介した別種の人的な繋がりも存在していたわけである。その具体例の一つが、顧孟餘が戦後の香港から台湾および日本に向けて自由主義勢力の結束を訴えかけた政治運動である。この政治運動は、冷戦が半ば熱戦として台湾海峡を覆うなかで、共産党（人民共和国）の独裁にも国民党（民国）の独裁にも反対して、新たな自由主義勢力が台湾から香港そして大陸中国へと拡大していくことを期待した。この運動は、1950年代前半の短時間で終わってしまったが⁽⁹⁾、戦後東アジアを「大陸中国（人民共和国）＝東側陣営／台湾（民国）＝西側陣営」と単純に二分できないことを示唆している。この運動は旧満鉄関係者の支援を得ながら日本で

(8) その一例は、中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』（有志舎、2018年）「はじめに」でも指摘しておいた。

も展開され、その主要な舞台となった『民主勢力』は第2巻第1期（東洋文庫所蔵）で次のように息巻いていた。日本語の原文を引用しておこう。

こゝでは特に日本の読者に訴えたい。われわれが、日本において、この民主勢力即ち反コンミニズムと反ファツシヨの運動を展開するのは、日本はわれわれにとって、歴史的にも現実的にも深い関係があるからである。……真に救国と人権とを求めた孫文の革命は日本において始められた。いま人権と友愛の運動が日本において始められることを望むのである。実に多難の途である。しかし、この小冊を機として、広く日本人及びその他全アジアの人達と結びつくことが出来れば、われわれとしては最大の喜びである。この結びつきのためには、われわれは凡ゆる機会をつくる心算であるが、日本の人達も、凡ゆる点でこれに御協力を願いたい⁽¹⁰⁾。

戦後日中関係史や戦後東アジア関係史は、既存の史資料を再整理しながら新史資料を発掘することによって、研究の余地を膨大に残している⁽¹¹⁾。本論文集がその起爆剤の一つになれば幸いである。

(9) 関智英『対日協力者の政治構想——日中戦争とその前後』（名古屋大学出版会、2019年）、黄克武『顧孟餘的清高——中国近代史的另一種可能』（香港中文大学出版社、2020年）にも言及がある。なお、中村元哉「黄克武著『顧孟餘的清高——中国近代史的另一種可能』（香港中文大学出版社）」（『中国研究月報』第75巻第1号、2021年1月）、中村元哉「黄克武著、『顧孟餘的清高——中国近代史的另一種可能』（『中央研究院近代史研究所集刊』第114期、2021年12月）も参照のこと。

(10) 「編集後記」（『民主勢力』第2巻第1期、1952年1月15日）。

(11) 陳来幸編『冷戦アジアと華僑華人』（風響社、2023年）も良書である。

【参考資料1】

国際シンポジウム「冷戦下における日本と中華圏の人物交流史（第1回）」

主催：東洋文庫現代中国班「国際関係・文化」グループ

共催：三菱財団人文科学研究助成（代表・中村元哉）

日時：2021年9月10日（金）

形態：完全オンライン（東洋文庫Webex end-to-end版）

言語：中国語（通訳は原則なし）

趣旨

東洋文庫現代中国班「国際関係・文化」グループは、近年、東洋文庫に所蔵されている日中戦争期の「満洲国」および汪精衛政権に関する史資料や戦後の日中交流史を物語る日本人中国旅行記を精力的に整理してきた。これらの基礎作業から得られた新たな知見は、戦前・戦中の日中間の人的ネットワークが戦後の冷戦下における日本と中華圏（大陸中国、香港、台湾）の人の往来へと連続していることであった。むろん、戦前・戦中・戦後には不連続性も存在し、台湾海峡を挟んだ中国分断や日中の不正常な関係による特殊性も見落としてはならない。

本シンポジウムは、以上のような人物交流史を、東洋文庫の史資料を土台として、中国、香港、台湾の研究者と共有しようとする試みである。この研究は、台湾との断交（1972年）、改革開放（1970年代）、香港返還（1997年）へと至る1970年代から1990年代の日本と中華圏の人物交流史を紐解く歴史的視座を提供することにもなるだろう。

プログラム（所属は当時）

10:00-10:10 村田雄二郎（東洋文庫・同志社大学）「開会の挨拶」

10:10-12:30 東洋文庫「日本人中国旅行記」から読み解く戦後日中・日台関係史

司会：関智英（東洋文庫・津田塾大学）

村田雄二郎（東洋文庫・同志社大学）「概要」

中村元哉（東洋文庫・東京大学）「特徴1——政治団体」

山口早苗（津田塾大学）「特徴2——「満洲国」・汪精衛政権」

久保茉莉子（成蹊大学）「特徴3——婦人団体」

コメント：楊大慶（ジョージ・ワシントン大学）

潘光哲（中央研究院近代史研究所）

13:30-15:00 戦前・戦中・戦後の連続と不連続性

司会：吉見崇（東京経済大学）

林果顕（政治大学台湾史研究所）「冷戦期における日台間の文化交流と人的ネットワーク——出版物の輸出入の観点から」

島田大輔（日本学術振興会特別研究員（PD））「中国専門記者太田宇之助の戦後——戦後の活動とその遺志としての東京都太田記念館」

15:20-16:50 戦後の諸相

司会：久保茉莉子（成蹊大学）

陳学然（香港城市大学）「道徳再建運動における人的ネットワークと思想交流——東京・台北・香港」

池田尚広（杏林大学）「人的往来からみる1950-60年代の日中民間交流」

17:00-18:00 総合討論

司会：中村元哉（東洋文庫・東京大学）

総合コメント：黄克武（中央研究院近代史研究所）

18:00 村田雄二郎（東洋文庫・同志社大学）「閉会の挨拶」

【添付資料2】

国際シンポジウム「冷戦下における日本と中華圏の人物交流史（第2回）」

主催：東洋文庫現代中国班「国際関係・文化」グループ

共催：日中関係論壇（代表・高原明生）

科研費（A）「中国の改革開放萌芽期の再検討」（代表・中村元哉）

日時：2022年8月29日（月）

形態：オンライン会議形式（end-to-end版）

言語：中国語（通訳は原則なし）

趣旨

東洋文庫現代中国班「国際関係・文化」グループは、近年、東洋文庫に所蔵されている日中戦争期の「満洲国」および汪精衛政権に関する史資料や戦後の日中交流史を物語る日本人中国旅行記を精力的に整理してきた。これらの基礎作業から得られた新たな知見は、戦前・戦中の日中間の人的ネットワークが戦後の冷戦下における日本と中華圏の人の往来へと連続していることであった。むしろ、戦前・戦中・戦後には不連続性も存在し、台湾海峡を挟んだ中国分断や日中の不正常な関係による特殊性も見落としてはならない。

本シンポジウムは、昨年度（第1回）の成果を踏まえながら、以上のような人物交流史を思想・文化の交錯へと拡大して、中国、香港、台湾の研究者と共有しようとする試みである。この研究は、台湾との断交（1972年）、改革開放の開始（1970年代）、香港の返還（1997年）へと至る1970年代から1990年代の日本と中華圏の人物交流史を紐解く歴史的視座を提供することにもなるだろう。

プログラム（所属は当時）

〈開会の挨拶〉

村田雄二郎（東洋文庫・同志社大学）

〈第一報告〉

司会兼コメント：山口早苗（日本学術振興会特別研究員（PD））

王敏釗（北京大学）「赤い夕陽と広大な大地——近代日本が満洲で構築した文化シンボルと現代日本の対中イメージ」

〈第二報告〉

司会兼コメント：久保茉莉子（埼玉大学）

ニコロヴァ・ヴィクトリヤ（東京大学・院）「想像としての中国——戦争の時代に生きた中国研究者を再考する」

〈第三報告〉

司会兼コメント：池田尚広（杏林大学）

神田豊隆（新潟大学）「戦後アジアにおける社会民主主義国際ネットワークとその限界——冷戦と脱植民地化の文脈」

〈第四報告〉

司会兼コメント：吉見崇（東京経済大学）

李培徳（香港大学名誉教授）「文化冷戦下の香港の役割——胡文虎を事例に」

〈総括討論〉

司会：中村元哉（東洋文庫・東京大学）

Introduction

New Perspectives on East Asian Postwar History

NAKAMURA Motoya

This collection of essays represents the “characteristics of Toyo Bunko” in that it examines the history of human and cultural exchange spanning World War II between Japan and the Greater China region (mainland China, Hong Kong, and Taiwan after the establishment of the People’s Republic of China). However, it is the world’s foremost research results on this topic as well. I say it represents the “characteristics of Toyo Bunko” since the research results are based on Toyo Bunko’s collection of “Japanese Travel Accounts of China from the Meiji Period” (“Japanese Travel Accounts of China”). This commentary is freely available in the form of the work by the Committee for Research on Modern China (ed.), *Japanese Travel Accounts of China from the Meiji Period (Annotated)*, Toyo Bunko, 1980, and the work by Yujiro Murata, Motoya Nakamura, Sanae Yamaguchi, Naohiro Ikeda, Takashi Yoshimi, Mariko Kubo, Tomohide Seki, Naomi Tsuji, *Japanese Travel Accounts of China from the Meiji Period (Annotated) Supplement (Postwar Edition)*, Toyo Bunko Superdisciplinary Asian Research Division, Modern Chinese Studies department (International Relations and Culture Group), 2023, doi: 10.24739/0002000041⁽¹⁾, and this collection of essays sheds light on some characteristics of this commentary. I say “world’s foremost,” because through the Japanese Travel Accounts of China collection, it reveals a new aspect of the postwar history of Japan-China relations (1945–1972) until the normalization of their diplomatic relations, while simultaneously providing new historical facts for researchers

(1) Accessible at “Toyo Bunko→Search the Catalogue→ERNEST→Research Results→Contemporary Chinese Studies Group→China Travel Accounts Project,” and available to all.

in Japan and abroad who will benefit these new findings to reconsider the history of Japan-China relations after the war from a more macro perspective.

This collection of papers is the result of work undertaken by the members of the Japanese Travel Accounts of China group, namely, Yujiro Murata, Motoya Nakamura, Sanae Yamaguchi, Naohiro Ikeda, Takashi Yoshimi, Mariko Kubo, Tomohide Seki, Yoshiyuki Aihara, and Naomi Tsuji, who are part of Toyo Bunko Modern Chinese Studies department (International Relations and Culture Group). Specifically, the collection builds on the research results of the first and second international “History of Human Exchange between Japan and the Greater China Region during the Cold War” symposiums organized by Toyo Bunko Modern Chinese Studies department in 2021 and 2022, respectively (see References one and two at the end of this introduction).

This collection of essays is academically significant because it demonstrates that despite the ideological conflicts that resulted in the Cold War between the US and Soviet Union dominating East Asia from the late 1940s to the early 1970s, postwar human and cultural exchanges (including experiences) between Japan and China continued uninterrupted. Of course, there is previous research focusing on the history of private trade and exchanges between the two countries⁽²⁾ or summarizing the political and diplomatic relations between Japan and Taiwan⁽³⁾ and the psychological state of the public during the Cold War⁽⁴⁾. However, this collection contains fresh perspectives that previous studies did not fully explain. There are at least three such perspectives.

The first spans the Sino-Japanese War or World War I period, bringing to light the

(2) If we were to include overviews as well, there are innumerable books. For now, I will refer to only one of the latest studies supporting the experimental study undertaken by Shimakura, Tamio and Inoue, Masaya (eds.), *Documents on Japan-China Trade Relations*, Yumani Shobo, 2018.

(3) Kawashima, Shin, Shimizu, Urara, Matsuda, Yasuhiro, and Yang, Yongming, *History of Taiwan-Japan Relations: 1945–2020 [enlarged edition]*, University of Tokyo Press, 2020.

(4) Masuda, Hajime, *The Cold War World in People's Minds*, Iwanami Shoten, 2022.

prewar, wartime, and postwar links. These include links from the Republic of China (ROC) period under the leadership of the Chinese Nationalist Party (KMT). The second perspective organizes the appeals of the People's Republic of China (PRC) to the Japanese people before the normalization of diplomatic relations between Japan and China, conversely revealing one aspect of the propaganda diplomacy (propaganda policy) of the Chinese Communist Party (CCP) at that time. The third clarifies that although the relationship between Japan and Greater China was formed in the context of the "Cultural Cold War" in international relations across East Asia at the time (the "Cultural Unification Front" from the perspective of the KMT, the CCP, and United States)⁽⁵⁾, an East Asian historicity continued through the prewar, wartime, and postwar periods.

The publication of this collection will contribute to a greater understanding of the human and cultural relationship between Japan and Greater China that developed in postwar East Asia during the Cold War era. This deepening cognizance suggests a limit to what can be said about postwar East Asia solely from the perspective of the Cold War⁽⁶⁾, i.e., by discussing postwar East Asian history from the late 1940s to the early 1990s solely as the history of the Cold War from a global history perspective, regardless of whether it focuses on political powers or the people.

Here, I wish to note the following three important points for further developing

(5) Pan, Kuang-Che, "Special Issue: Rethinking the Cold War in the East Asia Context-Introduction," *Si yu Yan*, Vol. 57, No. 4, 2019, Tsuchiya, Yuka, Kawashima, Shin, Kobayashi, Somei (eds.), *The Cultural War and the Development of Knowledge: American Strategy and East Asian Logic*, Kyoto University Press, 2022.

(6) One example is the various circumstances surrounding liberalism in postwar Taiwan. See Nakamura, Motoya, *Anti-Communist Liberalism in Taiwan and Hong Kong during the US-USSR Cold War: From the Context of the Political Background of Human Rights*, in National Chengchi University Library Special Collections Management Group, *The Unending War: Human Rights Issues in Postwar East Asia*, National Chengchi University Library, 2019.

the history of postwar Japan-China relations and postwar East Asian relations during the Cold War period.

First, if the Japanese Travel Accounts of China collection were to be organized with a focus on politicians or various organizations in which politicians were involved, it would reveal several records of visits to China by Liberal Democratic Party-affiliated groups (including the Liberal Party and the Reform Party), Japan Socialist Party-affiliated groups (including the Japan Socialist Party and the Democratic Socialist Party), Diet member caucuses and friendship groups, and even local governments. In other words, as researchers, it is possible to recover a certain amount of information on Chinese negotiation with Japan from these highly politicized records of visits to China. Key figures of the CCP, such as Mao Zedong, Zhou Enlai, Deng Xiaoping, Peng Zhen, Liao Chengzhi, Nan Hanchen, Qiao Guanhua, Li Dequan, Zhao Anping, Wang Guoquan, Wang Xiaoyun, Sun Pinghua, and Guo Moruo, as well as those believed to be in charge of practical negotiations with Japan are mentioned frequently. Some examples include Chu Tunan (Born in Yunnan / Joined the CCP in 1926 / Dual party member who was also part of the China Democratic League during the ROC period / Chair of the Chinese Foreign Cultural Association), Liu Xiwen (Born in Liaoning / Joined the CCP in 1938 / Vice Minister of Foreign Trade / Japan-China Memorandum Trade Office / Chinese Director of the Japan-China Long-Term Trade Committee), Wu Shudong (Japan-China Memorandum Trade Office in Tokyo [1964–68], Deputy Director General of the Foreign Trade Department), and Xu Zongmao (Liaison Officer of the Japan-China Memorandum Trade Office in Tokyo [1964–68]). Others whose biographies are unknown are mentioned as well, such as Yang Wenyu and Yong Longgui. Even accounting for the possibility of people operating under pseudonyms, it is possible to gain a realistic sense of the history of postwar Japan-China relations by making a list of associated persons and examining them in detail.

Second, apart from Japanese Travel Accounts of China, which is a collection possessed by Toyo Bunko, or similar works possessed by other research institutions,

historical materials maintained by people who were involved in the field of Japan-China relations at that time have been donated (transferred) to academic institutions in various parts of Japan⁽⁷⁾. For example, Toyo Bunko's Modern Chinese Studies department (International Relations and Culture Group) possesses the transcript of an interview (conducted on September 1, 2021) with Ryuji Tsuboi, who visited China on a private visit in early 1968 and served as public secretary to Kei Hoashi, a member of the House of Representatives of the Socialist Party of Japan. This transcript includes a commemorative photograph of his meeting with Premier Zhou Enlai (photograph published in the January 19, 1968 of the People's Daily, p. 4). The travel itinerary of this private delegation to China also shows a representative travel pattern of delegations to China.

Travel Itinerary [Prepared by: Mr. Ryuji Tsuboi].

January 1968

- 9 Evening Kobe Port Departure on Chinese Freighter, *Liaoyuanhao*
- 14 Emergency anchoring in Shandong Peninsula/Rongcheng Bay due to inclement weather
- 16 Noon arrival at Port of Tianjin → To Beijing (By passenger car)

(7) For example, the Faculty of Letters of the Kyoto University possessed the original documents of Yoshimi Furui (which are currently being organized at the National Diet Library) for a while. One of the academic works that utilized these Furui documents is the following book: Lu, Xueying, *Furui Yoshimi and China: The Road to Normalization of Diplomatic Relations between Japan and China*, Shibunkaku Shuppan, 2011. However, there are several academic books that examine the history of the normalization of Japan-China diplomatic relations, such as Inoue, Masaya, *A Political History of the Normalization of Diplomatic Relations between Japan and China*, Nagoya University Press, 2010 and Wang, Xueping (ed.), *Postwar Japan-China Relations and Liao Chengzhi: Chinese Experts on Japan and Japanese Policy*, Keio University Press, 2013. It is necessary to read and scrutinize them in a balanced manner.

- 18 2:40–5:00 p.m. Meeting with Premier Zhou Enlai in the Great Hall of the People
- 21 Beijing → Shanghai (By air)
- 28 Shanghai → via Nanjing → Jinan, Shandong Province (By air)
- 30 Jinan → Beijing (By air)

February

- 5 Afternoon: Attended a lecture by Mr. Guo Moruo

Commemorative photograph with Premier Zhou Enlai (January 18, 1968, at the Great Hall of the People) [courtesy of Mr. Ryuji Tsuboi]



Front row, from left: Wang Yinpu, Zhang Xiruo, Yousaku Edamura (member of the House of Representatives), Hisao Ishino (member of the House of Representatives), Zhou Enlai, Toyojiro Fujiwara (former House of Representatives member), Yasuyuki Matsumoto, and unknown person (Funabashi City Council member*)

Middle row, from left: Mikihiko Noguchi, Ryuji Tsuboi, Shigeo Hiratzuka, Akio Kuroda, Takaharu Harada, and unknown person (Funabashi City Council member*)

Back row, from left: Unknown person (Chinese agent), Unknown person (Chinese agent), Jin Sucheng, Xiao Xiangqian, and Wang Xiaoyun

* who accompanied Toyojiro Fujiwara, a friend of Guo Moruo in exile

- 6 Beijing → via Zhengzhou → via Wuhan → Changsha, Hunan Province (By air)
- 7 Changsha → Shaoshan (Chairman Mao's birthplace) (3 hours by Microbus)
- 8 Shaoshan → Changsha
- 9 Changsha → Nanchang, Jiangxi Province (By air)
- 11 Nanchang → Ji'an (By passenger car)
- 12 Ji'an → Jinggang Mountains (Base of operations during the revolution) (7 hours by Microbus)
- 14 Jinggang Mountains → Ji'an. Forced to change from microbus to jeep because of heavy snow
- 15 Ji'an → Nanchang (By passenger car)
- 16 Nanchang → Hangzhou (By air)
- 17 Hangzhou → Xin'an River Dam and Power Plant (By passenger car)
- 18 Xin'an River Dam → Hangzhou (By passenger car)
- 22 Hangzhou → Shanghai (2.5 hours by train)
- 24 Afternoon departure from Huangpu Port, Shanghai, on Chinese freighter, *Zhenlihao*, 8,000 tons
- 25 Afternoon landing at Moji port

Third, there existed a personnel flow that can be schematically described as “the KMT + former Manchukuo officials + former Wang Jingwei administration officials ⇔ Hong Kong (⇔ Taiwan) ⇔ Japan.” The existence of human ties between Japan and China before the normalization of their diplomatic relations and during the postwar period is well known⁽⁸⁾, but in fact, a different type of human ties existed through Hong Kong. One concrete example of this is the political movement by Gu Mengyu, who appealed for the unity of liberal forces from Hong Kong to Taiwan and Japan after the

8 One example was pointed out in the “introduction” section of the following research book: Motoya Nakamura, *Genealogy of Liberalism in China, Hong Kong, and Taiwan*, Yushisha, 2018.

war. This political movement aimed for the expansion of new liberal forces from Taiwan to Hong Kong and then mainland China, in opposition to both the dictatorships of the CCP (PRC) and the KMT (ROC) and the fierce fighting at the Taiwan Strait Crisis in the middle of the Cold War. Although this was a brief movement that developed in the early 1950s before dissolving⁽⁹⁾, it represented an argument against the portrayal of postwar East Asia as simply being divided into two camps: Mainland China (PRC) = Eastern camp and Taiwan (ROC) = Western camp. This movement also developed in Japan with the support of people related to the former Manchuria Railway, and an issue of *Democratic Front* (owned by Toyo Bunko), which was the main stage of the movement, had the following enthusiastic words. I quote from the original Japanese text.

We want to appeal especially to the Japanese readers. We are developing this democratic force in Japan, an anti-communist and anti-fascist movement, because we have a deep historical and practical relationship with Japan. ... Sun Yat-sen's revolution, which truly sought national salvation and human rights, began in Japan. It is my hope that a movement for human rights and fraternity will now be launched in Japan. Indeed, it is a difficult task. However, it would be our greatest pleasure to be able to use this booklet as an opportunity to connect with the people of Japan and the rest of Asia. We intend to create every possible

(9) Tomohide Seki, *Political Conceptions of Collaborators against Japan: Before, During, and After the Sino-Japanese War*, Nagoya University Press, 2019, Huang Kuwu, *The Solitary Gu Mengyu: Another Potential History of Modern China*, The Chinese University of Hong Kong Press, 2020. Also see Nakamura, Motoya, "Huang Kuwu, *The Solitary Gu Mengyu: Another Potential History of Modern China*," *Monthly Journal of Chinese Affairs*, Vol. 75, No. 1, 2021, Nakamura, Motoya, "Max K. W. Huang, *Above and Apart: Gu Mengyu and His Search for an Alternative Path in Modern Chinese History*," *The Bulletin of the Institute of Modern History, Academia Sinica*, No. 114, 2021.

opportunity for this connection, and we hope that the Japanese people will cooperate with us in every respect⁽¹⁰⁾.

There is enormous scope for research into the history of postwar Japan-China relations and the history of postwar East Asian relations by organizing existing historical materials and uncovering new ones⁽¹¹⁾. I hope this collection of essays will act as a catalyst for more such research.

(10) "Editorial Postscript," *Democratic Front*, Vol. 2, No. 1, 15 January 1952.

(11) Chin, Laikou ed., *Cold War Asia and the Overseas Chinese*, Fukyousha, 2023. This is another good book.

[Reference Material 1]

International Symposium “History of Human Exchange between Japan and the Greater China Region during the Cold War (I)”

Hosted by: Toyo Bunko Modern Chinese Studies department’s “International Relations and Culture” Group

Funded by: The Mitsubishi Foundation Research Grant for the Humanities (Representative: Motoya Nakamura)

Date: Friday, September 10, 2021

Form: Completely online (Toyo Bunko Webex end-to-end version)

Language: Chinese

Objective

In recent years, Toyo Bunko Modern Chinese Studies department’s “International Relations and Culture” Group has been diligently organizing the historical materials in Toyo Bunko collection related to the Japanese Manchurian puppet state and the Wang Jingwei administration during the Sino-Japanese war as well as Japanese accounts of travel to China regarding postwar Sino-Japanese exchange. The knowledge obtained through this research suggests that the human network between Japan and China during the prewar and wartime periods was continuous with the human traffic between Japan and the Chinese sphere (mainland China, Hong Kong, and Taiwan) during the postwar Cold War period. Of course, discontinuations existed during those periods, and the peculiarities caused by the division of China across the Taiwan Strait and the irregular relations between Japan and China should not be overlooked.

This symposium is an attempt to share the above history of human exchange, based on historical materials at Toyo Bunko, with researchers in China, Hong Kong, and Taiwan. This research will also provide a historical perspective to unravel the history of human exchange between Japan and Greater China between the 1970s and

1990s, which led to the cross-strait relations with Taiwan (1972), reform and opening-up (1970s), and the return of Hong Kong (1997).

Program (*Affiliations at the time)

10:00–10:10 Yujiro Murata (Toyo Bunko / Doshisha University) “Opening Remarks”

10:10–12:30 History of Postwar Japan-China and Japan-Taiwan Relations as Read from
Toyo Bunko’s “Japanese Travel Accounts of China”

Chair: Tomohide Seki (Toyo Bunko / Tsuda University)

Yujiro Murata (Toyo Bunko / Doshisha University) “Overview”

Motoya Nakamura (Toyo Bunko / The University of Tokyo) “Feature 1: Political
Organizations”

Sanae Yamaguchi (Tsuda University) “Feature 2: Manchuko and the Wang Jingwei
Administration”

Mariko Kubo (Seikei University) “Feature 3: Women’s Organizations”

Comments: Yang Daqing (George Washington University) and Pan Guangzhe
(Institute of Modern History, Academia Sinica)

13:30–15:00 Continuity and Discontinuity before, during, and after World War II

Chair: Takashi Yoshimi (Tokyo Keizai University)

Lin Guo-Sian (National Chengchi University) “Cultural Exchange and Human
Networks between Taiwan and Japan during the Cold War: From the Perspective
of Import/Export of Publications”

Daisuke Shimada (Japan Society for the Promotion of Science) “Postwar Years of
Unosuke Ota, Chinese Reporter: Postwar Activities and the Ota Memorial
Museum in Tokyo as His Legacy”

15:20–16:50 Postwar Phases

Chair: Mariko Kubo (Seikei University)

Chan Hok Yin (City University of Hong Kong) “Human Networks and Ideological
Exchanges in the Moral Reconstruction Movement: Tokyo, Taipei, and Hong

Kong”

Naohiro Ikeda (Kyorin University) “Sino-Japanese Private Exchange in the 1950s and ’60s from the Perspective of Human Movement”

17:00–18:00 General Discussion

Chair: Motoya Nakamura (Toyo Bunko / The University of Tokyo)

Comments: Huang Kuwu (Institute of Modern History, Academia Sinica)

18:00 Yujiro Murata (Toyo Bunko / Doshisha University) “Closing Remarks”

[Reference Material 2]

International Symposium “History of Human Exchange between Japan and the Greater China Region during the Cold War (II)”

Hosted by: Toyo Bunko Modern Chinese Studies department’s “International Relations and Culture” Group

Funded by: Grant-in-Aid for Scientific Research (A) “Reexamination of China’s Budding Reform and Opening-Up Period” (Representative: Motoya Nakamura)

The Japan-China Relations Organization (Representative: Akio Takahara)

Date: Monday, August 29, 2022

Format: Online conference format (end-to-end version)

Language: Chinese

Objective

In recent years, Toyo Bunko Modern Chinese Studies department’s “International Relations and Culture” Group has been diligently organizing the historical materials in Toyo Bunko collection related to the Japanese Manchurian puppet state and the Wang Jingwei administration during the Sino-Japanese war as well as Japanese accounts of travel to China regarding postwar Sino-Japanese exchange. The knowledge obtained

through this fundamental work suggests that the human networks between Japan and China during the prewar and wartime periods were continuous to the traffic of people between Japan and the Greater China region during the postwar Cold War period. Of course, discontinuations existed during those periods, and the peculiarities caused by the division of China across the Taiwan Strait and the irregular relations between Japan and China should not be overlooked.

This symposium is an attempt to build on the results of the previous year's symposium (I), expand the abovementioned history of human exchange to the intersections of ideas and cultures, and share it with researchers in China, Hong Kong, and Taiwan. This research will also provide a historical perspective to unravel the history of human exchange between Japan and Greater China from the 1970s to the 1990s, which led to the cross-strait relations with Taiwan (1972), the start of reform and opening-up (1970s), and the return of Hong Kong (1997).

Program (*Affiliations at the time)

(Opening Remarks)

Yujiro Murata (Toyo Bunko / Doshisha University)

<First Report>

Chair and Comments: Sanae Yamaguchi (Japan Society for the Promotion of Science)

Wang Minzhao (Peking University) "The Red Setting Sun and the Vast Earth: Cultural Symbols Constructed by Modern Japan in Manchuria and Modern Japan's Image of China"

<Second Report>

Chair and Comments: Mariko Kubo (Saitama University)

Viktoriya Nikolova (The University of Tokyo) "The China of Imagination: Reconsidering China Studies Scholars Who Lived in a Time of War"

<Third Report>

Chair and Comments: Naohiro Ikeda (Kyorin University)

Yutaka Kanda (Niigata University) “International Networks of Social Democracy and Their Limits in Postwar Asia: On the Background of the Cold War and Decolonization”

<Fourth Report>

Chair and Comments: Takashi Yoshimi (Tokyo Keizai University)

Lee Pui-tak (University of Hong Kong) “Hong Kong’s Role in the Cultural Cold War: The Case of Aw Boon Haw”

(Discussion Summary)

Chair: Motoya Nakamura (Toyo Bunko / The University of Tokyo)

前言

战后东亚史的新视角

中村 元哉
(翻译：张诗佳)

本论文集，是关于日本与中华圈（指中国大陆及中华人民共和国成立后的香港、澳门、台湾，此处暂且同义于“两岸四地”来使用这个概念）之间人物与文化层面交流史的“非东洋文库不可”的“世界前沿性”研究成果，在时间上横跨整个第二次世界大战时期。之所以说“非东洋文库不可”，是因为本研究的资料来源于东洋文库的“明治以后日本人的中国旅行记”系列藏书。该藏书的全貌可见于以下两本书，已在网络上免费公开：东洋文库近代中国研究委员会编《明治以后日本人的中国旅行记（解题）》（财团法人东洋文库，1980年）；村田雄二郎、池田尚广、久保茉莉子、关智英、辻直美、中村元哉、山口早苗、吉见崇《明治以后日本人的中国旅行记（解题）》增补版（东洋文库跨学科亚洲研究部门现代中国研究班国际关系与文化研究组，2023年，doi: 10.24739/0002000041⁽¹⁾）。本论文集也进一步揭示了该藏书的一些特性。另外，“世界前沿性”指的是本论文集在利用“旅行记”藏书，尽力还原中日邦交正常化之前的战后中日关系史（1945年至1972年）的同时，还努力为海内外学者们从更宏观的视角研究战后中日关系史构建新的史实基础。

本论文集是东洋文库现代中国研究班“国际关系与文化研究组”下属“日本人的中国旅行记”主题研究成员们（村田雄二郎、池田尚广、久保茉莉子、关智英、中村元哉、山口早苗、吉见崇及相原佳之、辻直美）的活动成果。具体而言，研究成果主要基于东洋文库现代中国研究班于2021、2022年主办的两场“第

(1) 检索顺序为“东洋文库→东洋文库电子资源储存库→研究成果→现代中国研究班”。

1 届、第 2 届冷战时期日本与‘中华圈’的人物交流史”国际学术会议（会议详情可参照末尾的参考资料 1、2）。

中日邦交正常化以前（1940年代后半期到1970年代前半期），美苏冷战带来的意识形态对立笼罩了整个东亚，但战后中日之间的人物与文化交流（包括实地体验）绝没有中断。本论文集从实证的角度考察了这一段历史，这也是本书学术意义的所在。当然，以往的研究也从各个角度论及了这段时间的历史，例如有论及中日之间民间层面的贸易与交流⁽²⁾、日本与台湾之间政治外交关系⁽³⁾、关于冷战下普通人心理状态等内容的著作⁽⁴⁾。但以上研究都或多或少存在一些不足，而本书至少在以下三个方面较前人研究具备新的视角。

首先，时间上横跨了中日战争或者第二次世界大战时期，即阐明了战前、战时、战后的关联性。此关联性，也包括与中国国民党统治下中华民国时期的连续性。第二，整理了中华人民共和国在中日邦交正常化之前对日本人的宣传内容，以反观当时中国共产党的宣传政策。第三，证明了在“文化冷战”（国民党、共产党及美国方面称为“文化统一战线”）的国际背景下⁽⁵⁾，东亚历史仍然具有贯通战前、战时、战后的连续性。

本论文集的刊行，将有助于加深对战冷时期日本与中华圈之间人物及文化交流的理解。这种认识的深化表明仅从冷战的视角解释战后东亚的历史是远远不够的⁽⁶⁾。换句话说，不管是从权力或是民众的角度，把1940年代后半期至1990年代前半期的战后东亚史仅作为冷战全球史的一部分的看法是存在局限的。

为了进一步发展冷战时期战后中日关系史乃至东亚关系史研究，有以下三点

(2) 相关概论书多不胜数，此处只举实证研究的一处最新成果：嶋仓民生·井上正也编『日中贸易关系资料』(ゆまに书房，2018年)。

(3) 川岛真·清水丽·松田康博·杨永明『日台关系史——1945-2020 [增补版]』(东京大学出版会，2020年)。

(4) 益田肇『人们的冷战世界』(岩波书店，2022年)。

(5) 潘光哲「重思东亚脉络下的冷战」专号导言(『思与言』第57卷第4期，2019年)，以及，森口(土屋)由香·川岛真·小林聪明编『文化冷战与知识的展开——美国的战略·东亚的论理』(京都大学学术出版会，2022年)。

是需要我们注意的。

首先，以政治家或者与其有关的各种团体为重点来整理“旅行记”时，会发现自由民主党派（含自由党、改进党）和日本社会党派（含民主社会党、民社党），以及议员联盟、各种友好团体、地方自治体的中国访问记录是比较多的。也就是说，利用这些政治色彩浓厚的访中记录，在某种程度上可以还原参与对日交涉的中国方面有关人员的信息。除了毛泽东、周恩来、邓小平、彭真、廖承志、南汉宸、乔冠华、李德全、赵安平、王国权、王晓云、孙平化、郭沫若等共产党主要人物之外，在资料中还可以看到一些承担了对日交涉实际事务的人物的身影。比如，楚图南（云南人，1926年加入中国共产党，中华民国时期同时加入了中国民主同盟，具有双重党籍，曾为中国人民对外文化协会会长）；刘希文（辽宁人，1938年加入中国共产党，曾任对外贸易部、中国中日备忘录贸易办事处代表、中日长期贸易协议委员会中国方主任）；吴曙东（1964至1968年出任中国中日备忘录贸易办事处驻东京联络处代表一职，曾为对外贸易部四局副局长）；许宗茂（1964至1968年为中国中日备忘录贸易办事处驻东京联络处随员）等。另外，资料中还可见杨温玉、勇龙贵这样履历不明的人物。处理实际事务的人员也可能使用假名，如果能够形成名单细致地讨论这些登场人物的话，或许能够身临其境地再现战后中日关系史的某些场景。

第二，除了东洋文库所藏“旅行记”与其他研究机构的藏书之外，当年参与中日交流的当事者们保管的资料同时散见（捐赠或转让）于日本各地的学术机构⁽⁷⁾。像东洋文库现代中国研究班国际关系与文化研究组就保管了与坪井隆治相关的采访记录（2021年9月1日）及他个人所藏的珍贵史料。坪井曾任日本社会党众议院议员帆计的官方秘书，在1968年初对中国进行了私人访问。这些资料中有一张受周恩来总理接见时所拍的纪念相片（《人民日报》1968年1月19日第4版掲載）。坪井此次私人访问的日程表也可视作访中活动的典型安排。

(6) 此处可举出围绕战后台湾自由主义的各种形势的例子，具体内容可参照：中村元哉「美苏冷战下的港台反共自由主义——解读人权思想的政治背景」（国立政治大学图书馆特藏管理组『未完结的战争——战后东亚人权问题』国立政治大学图书馆，2019年）。

与周恩来总理的纪念照片（1968年1月18日于人民大会堂）〔提供者：坪井隆治〕



前排左数依次为：王荫圃、张奚若、枝村要作（众议院议员）、石野久男（众议院议员）、周恩来、藤原丰次郎（原众议院议员）、松本康行、不详（船桥市议会议员*）
中排左数依次为：野口干彦、坪井隆治、平塚重夫、黑田明男、原田隆治、不详（船桥市议会议员*）
后排左数依次为：不详（中方工作人员）、不详（中方工作人员）、金苏城、萧向前、王晓云
*是与流亡时的郭沫若亲近的藤原丰次郎的同行之人

〈活动日程表〔制作人：坪井隆治氏〕〉

1968年1月

9日 傍晚 从神戸港出港 乘坐中国货船「燎原号」

14日 海上遇风暴 暂时停泊在山东半岛荣成湾

(7) 例如，京都大学人文科学研究所就曾暂时保管了古井喜实的文书，该资料现由日本国会图书馆进行整理。利用该资料产出的学术成果之一有鹿雪莹『古井喜实与中国——日中邦交正常化之路』（思文阁出版，2011年）。但是迄今为止讨论中日邦交正常化历史的研究著作有很多，如井上正也『日中国交正常化の政治史』（名古屋大学出版会，2010年），王雪萍编著『战后日中关系与廖承志——中国的知日派（ジャパハンズ）和对日政策』（庆应义塾大学出版会，2013年）等。这些都有精读的必要性。

- 16日 正午 到达天津新港→北京（乘车）
- 18日 午后2:40-5:00 同周恩来总理会见 人民大会堂
- 21日 北京→上海（空路）
- 28日 上海→经过南京→山东省济南（空路）
- 30日 济南→北京（空路）
- 2月
- 5日 午后 听郭沫若演讲
- 6日 北京→经过郑州→经过武汉→湖南省长沙（空路）
- 7日 长沙→韶山（毛主席的出生地） 乘坐小型巴士 3小时到达
- 8日 韶山→长沙
- 9日 长沙→江西省南昌（空路）
- 11日 南昌→吉安（乘车）
- 12日 吉安→井冈山（革命战争时的根据地） 乘坐小型巴士 7小时到达
- 14日 井冈山→吉安 途遇大雪 小型巴士换乘吉普车赶路前往
- 15日 吉安→南昌（乘车）
- 16日 南昌→杭州（空路）
- 17日 杭州→新安江大坝 发电所（乘车）
- 18日 新安江大坝→杭州（乘车）
- 22日 杭州→上海（坐汽车 2 个小时30分钟）
- 24日 正午稍过 从上海黄浦江码头出港 乘坐8,000吨的中国货船“真理号”
- 25日 正午稍过 从门司港上陆

第三，存在以“国民党+旧满洲国关系者+旧汪精卫政权关系者⇔香港（⇔台湾）⇔日本”这种路径进行的人物交流。众所周知，战后至邦交正常化前的中日之间一直存在着人物联系，且这种联系往往是从战前、战中延续下来的⁽⁸⁾。但实

(8) 其中一个例子，可参见中村元哉『中国，香港，台湾におけるリベラリズムの系谱』（有志舎，2018年）的前言部分。

际上，还存在着另一种以香港为中介的人物联系。由顾孟余发起的旨在团结战后香港、台湾和日本的自由主义力量的政治运动就是一个例子。在台湾海峡处于半冷半热的混合战争的情况下，这次政治运动同时反对共产党在中国大陆的一党执政与国民党在台湾的统治，期望新自由主义力量可以由台湾及香港最终扩散到中国大陆。虽然这次运动在1950年代前半期短暂展开后就迅速式微了⁽⁹⁾、但启示我们并不能单纯从东西阵营对立（即中国大陆与台湾）的视角来理解战后东亚。这次运动还得到了旧满铁关系者的支持因而在日本展开，其主要的阵地为《民主势力》杂志（东洋文库藏）。该杂志在第2卷第1期中这样呼吁到（原文为日语）：

在这里尤其想向日本的读者们说明：我们及我们所代表的民主力量，之所以在日本开展反共产主义和反法西斯运动，是因为日本与我们有着深厚的历史与现实联系。……真心寻求救国与人权的孙文自日本开始他的革命事业，如今追求人权与友爱的运动在日本开始也是众望所归。我们知道这是一条多么任重道远的路，如果这本小册子能够成为更多日本人及其他亚洲人民团结起来的一个契机，则是我们最大的幸福了。为此，我们将全力创造一切机会，希望日本人民可以在一切方面与我们合作⁽¹⁰⁾。

以上，在整理现有史料与发掘新史料的基础上，战后中日关系史与战后东亚关系史还存在巨大的研究空间⁽¹¹⁾，若本论文集有幸成为这一学术领域的催化

(9) 关智英『対日协力者の政治构想——日中戦争とその前后』（名古屋大学出版会，2019年），黄克武《顧孟餘的清高——中国近代史的另一可能》（香港中文大学出版社，2020年）中均有论及。另参照中村元哉「黄克武著『顧孟餘的清高——中国近代史的另一可能』」（『中国研究月報』第75卷第1期，2021年1月），中村元哉「黄克武著，『顧孟餘的清高——中国近代史的另一可能』」（香港：中文大学出版社）」（『中央研究院近代史研究所集刊』第114期，2021年12月）。

(10) 「編集后记」（『民主势力』第2卷第1期，1952年1月15日）。

(11) 陈来幸编『冷战亚洲与华侨华人』（风响社，2023年）。这也值得参考。

剂，就再好不过了。

【参考资料1】

国际研讨会《冷战时期日本与“中华圈”（中国大陆·香港·台湾）的人物交流史（第1届）》

主办：东洋文库现代中国研究班“国际关系、文化”小组

协办：三菱财团人文科学研究助成金（代表：中村元哉）

时间：2021年9月10日（星期五）

会议方式：在线

会议语言：中文

会议宗旨

近年，东洋文库现代中国研究班“国际关系·文化”小组致力于研究整理文库所藏日中战争时期的“满洲国”、汪精卫政权的相关史料以及记录战后日中交流史的日本人中国旅行记。通过这些基础工作，我们发现战前及战时日中之间的人际关系网与战后冷战时期的日本、中华圈（中国大陆、香港、台湾）的人物往来存在一定的连续性。与此同时，我们也不能忽视战前、战时和战后的非连续性、冷战时期台湾海峡两岸的紧张对峙以及日中关系的特殊性。

本次研讨会是以东洋文库的历史资料为基础，当然与中国大陆、香港、台湾的研究者共同解读冷战时期的人物交流史的一次尝试。1970年代至1990年代经历了日台断交（1972）、改革开放起步（1970年代）、香港回归（1997）等重大事件，相信本研讨会将为考察这个时期的日本与中华圈的人物交流史提供新的研究视角。

议程（与会者工作单位以参会时为准）

10:00-10:10 村田雄二郎（东洋文库、同志社大学）致开幕词

10:10-12:30 从东洋文库“日本人的中国旅行记”解读战后中日、日台关系史

主持：关智英（东洋文库、津田塾大学）

村田雄二郎（东洋文库、同志社大学），《概要》

中村元哉（东洋文库、东京大学），《特征 1：政治团体》

山口早苗（津田塾大学），《特征 2：“满洲国”与汪精卫政权》

久保茉莉子（成蹊大学），《特征 3：妇女团体》

评论：杨大庆（乔治·华盛顿大学）

潘光哲（中央研究院近代史研究所）

13:30-15:00 战前、战时、战后的连续性与非连续性

主持：吉见崇（东京经济大学）

林果显（政治大学），《冷战时期台日文化交流与人脉关系——以出版品进出口为中心》

岛田大辅（日本学术振兴会特别研究员（PD）），《中国专门记者太田宇之助的战后活动与其遗志——东京都太田纪念馆》

15:20-16:50 战后诸相

主持：久保茉莉子（成蹊大学）

陈学然（香港城市大学），《道德重整运动中的人际网络与思想交流——东京、台北与香港》

池田尚广（杏林大学），《从人物往来看1950-60年代中日民间交流》

17:00-18:00 综合讨论

主持：中村元哉（东洋文库、东京大学）

评论：黄克武（中央研究院近代史研究所）

18:00 村田雄二郎（东洋文库、同志社大学）致闭幕词

【参考资料 2】

国际研讨会《冷战时期日本与“中华圈”（中国大陆·香港·台湾）的人物交流史（第 2 届）》

主办：东洋文库现代中国研究班“国际关系、文化”小组

协办：日中关系论坛（代表：东京大学·高原明生）

日本学术振兴会科研费（A）《中国改革开放萌芽期的再考察》（代表：

东京大学·中村元哉)

时间：2022年8月29日（星期一）

会议方式：在线

会议语言：中文

会议宗旨

近年，东洋文库当代中国研究班“国际关系·文化”小组致力于研究整理文库所藏日中战争时期的“满洲国”、汪精卫政权的相关史料、以及记录战后日中交流史的日本人中国旅行记。通过这些基础工作，我们发现战前及战时日中之间的人际关系网与战后冷战时期的日本、中华圈（中国大陆、香港、台湾）的人物往来存在一定的连续性。当然与此同时，我们也不能忽视战前、战时、战后的非连续性、冷战时期台湾海峡两岸的紧张对峙以及日中关系的特殊性。

本次研讨会以去年第一届的会议成果为基础，将会议主题从“人物交流史”进一步扩展至“思想与文化的交错”，期待与中国大陆、香港、台湾的研究学者共同探讨推动相关研究。1970年代至1990年代经历了日台断交（1972）、改革开放起步（1970年代）、香港回归（1997）等大事件，相信本研讨会将为考察这个时期的日本与中华圈的人物交流史提供新的研究视角。

议程（与会者工作单位以参会时为准）

致开幕词

村田雄二郎（东洋文库、同志社大学）

报告 1

主持兼评论：山口早苗（日本学术振兴会特别研究员（PD））

王敏钊（北京大学），《赤色夕阳与广阔大地——日本近代在满洲建构的文化符号与当代对华印象》

报告 2

主持兼评论：久保茉莉子（埼玉大学）

励亚（东京大学博士研究生），《想象中国——再考战争时代日本的中国研究

者》

报告 3

主持兼评论：池田尚广（杏林大学）

神田丰隆（新潟大学），《战后亚洲的社会民主主义国际网络与其极限——冷战和脱殖民地化》

报告 4

主持兼评论：吉见崇（东京经济大学）

李培德（香港大学名誉教授），《文化冷战下的香港角色——以胡文虎为例》

综合讨论

主持人：中村元哉（东洋文库、东京大学）